



東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター
The Newsletter **CNEAS**

第53号

● 目次 ●

巻頭言：震災復興と東北アジア研究センター	1
最近の研究会・シンポジウム等	2-4
著書紹介	4-5
センター新任紹介	6-7
人事異動	7
活動風景：現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニットの活動	8
編集後記	8



巻頭言

震災復興と東北アジア研究センター

東北アジア研究センター長 佐藤 源之



東北アジア地域における研究の実践から地域研究を創造的に定義することがセンターに課せられた一つの目的です。また大学の使命の一つとして、有形・無形文化財保護や防災対策など、行政を学術的に補完する社会活動もセンターでは活発化しています。震災の記憶を東北アジア地域に対して研究交流活動を通じて還元していくことも我々の重要な任務です。

東日本大震災から1年を経過した東北アジア研究センターでは、完全な復興をめざした努力が続いています。本センターが中核となり、東日本大震災の発生以前から文部科学省の予算を受け、センター外を含む多数の教員から構成される防災科学研究拠点活動が推進されてきました。東北大学では東日本大震災の経験を、次の震災に備えて生かすべく災害科学国際研究所を2012年4月1日に発足させましたが、本研究所設立の母体が防災科学研究拠点です。拠



復興のために使用している東北アジア研究センター「さくら棟」。4月にはこのさくらの前でセンターの花見を楽しみました。

点の活動は、被災地域の社会への影響や住民へのケア、災害時の交通、物流問題、文化財レスキュー活動など従来の理料系を中心とする地震予知や防災技術に留まらないものでした。

災害科学国際研究所の設立には本センターを始め、工学、理学、医学など学内の多くの部局から教員の定員を振替えることで新しい組織の運営に協力しています。また本研究所では設立準備委員会委員長として新研究所の実現に向けて努力をしてこられた平川新教授（元東北アジア研究センター長）が新所長に選出されました。また石渡、佐藤両教授は本研究所の兼務教員となりました。このように新研究所と東北アジア研究センターは綿密な連携をとりながら防災に係わる研究のポテンシャルを維持します。

一方、震災の復興にあたり東北地方の歴史資料保全を支援し、保全した資料の中から、人々のより善い生き方に寄与する文献を研究し、広く社会に伝播する取組みに貢献するため、上廣歴史資料科学研究部門がセンターに寄附研究部門として2012年4月1日に発足しました。本研究部門は特例民法法人上廣倫理財団のご寄付によるもので、今後5年間の活動を予定しています。

東日本大震災を機に片平地区の再整備など、東北大学全体の体制の見直しが行われています。研究での実績を着実にあげてきたセンターの将来を見据えた展望を拓いていきます。

最近の研究会、シンポジウム等

東北大学東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所 第3回学術交流連携講演会

春まだ遠い景色の北海道で、3月18日に伊達市噴火湾文化研究所の大島所長をはじめとした研究所の方々の多大な協力を得て、第3回の学術交流連携講演会を伊達市だて歴史の杜カルチャーセンターで開催しました。



開催会場

伊達市噴火湾文化研究所と本センターは、学術交流協定を結び、交代で相互訪問をし、講演会を開催しています。今回は伊達市で開くことになり、佐藤源之センター長と私磯部彰が講師を務めました。昨年の震災以降、伊達市が亘理方面の農家などに率先して救援の手を差し延べていただいたことを顧みて、平成23年度内に感謝の気持ちを込めて実施することを決め、伊達市噴火湾文化研究所に3月の実施を伝えて、「仙台・亘理と伊達市との連携を強める」を合言葉に開催させていただきました。



講演風景

佐藤源之先生は、「震災と電

波科学—防災・減災技術と遺跡調査への応用—」という題目で、東日本大震災でレーダーやリモートセンシング技術などの電波科学がどのように利用されたかを紹介し、松島瑞巖寺、奈良東大寺などで行った遺跡調査を踏まえて、今後の先端科学技術の文化財保護への応用について画像を提示しつつ解説をしました。

私磯部彰は、「明恵上人と西遊記物語—日本と中国・朝鮮半島の心の交流—」という題目で、鎌倉時代、唐三蔵西天取経ものがたりを愛した京都の高山寺の明恵房高弁（明恵上人）に焦点を当て、明恵上人が読み聞きをした三蔵法師の伝説や仏教説話を通して、今日のように天災、もしくは人災で混乱した世に生きた一人の宗教者のあり方を紹介しました。

当日は日曜日の午後ということで、人出が懸念されましたが、会場に準備した席はほぼ埋まったので、運営担当者として責務が果たせたことに胸を撫で下ろしました。

センター事務室からは前川順子さん、阿部由比子さん、下柿元稚子さん三名がお手伝い下さいましたので、センター刊行物やパンフレット類を伊達市の方々に展覧や配布することも出来ました。

(磯部 彰)



会場風景

文化財保護のための科学技術 —3.11地震・津波、フィレンツェ洪水を乗り越えて—

東北大学では東日本大震災1周年に際し“Spirit of the Tohoku University 2011.3.11”を開催し、諸外国から東北大学に関係する研究者を招へいして震災からの復興を誓う催しを行いました。その一環として「文化財保護のための科学技術—3.11地震・津波、フィレンツェ洪水を乗り越えて—」を東北アジア研究センターが3月10日に仙台市商工会議所で開催いたしました。本講演会にはイタリア文化会館にも後援をいただきました。

東日本大震災では津波によって多くの歴史的建造物や文化財が失われた一方、これらを救出する活動も活発に行われました。イタリアは我が国と同様の火山・地震国であり、自然災害に対する文化財保護の研究が盛んに行われています。1966年フィレンツェ市はアルノ川の氾濫による洪水で、多大な被害を受けたことから、文化財保護に関する経験が蓄積されてきた場所でも



講演者によるパネルディスカッション

あります。本講演会では、本センターの共同研究を発端として東北大学との大学間学術交流協定を締結したフィレンツェ大学からマッシミリアノ ピエラッティ准教授を招へいし、文化財を保護するため、

いかに科学技術を導入するかについて実践的な例を紹介しながら現状についての講演を行いました。ピエラッティ先生は1966年フィレンツェの洪水に端を発する文化財保護活動にかかわる大学での研究を紹介した後、ご自身が係わってきたレオナルド・ダ・ビンチの絵画の下に、別の絵が隠されているのではないかという説をレーダを使って調査してきた事例についてお話をしました。

また情報通信研究機構（NICT）福永香さんから電波と光の中間であるテラヘルツ波を利用したウフィッツィ美術館における初期ルネッサンス絵画の調査と修復に関する話題を提供していただきました。次に佐藤が実施している電波科学による遺跡保護、防災・減災技術を紹介し、奈良文化財研究所 金田 明大さん、高妻 洋成さんから国内における文化財保護のための科学技術応用について実例を通じた紹介をしていただきました。

奈良文化財研究所は、本センターが被災後に建屋の雨漏りのため文献・資料が水に濡れた際、冷凍乾燥による資料救援活動をお手伝いいただいた縁がございます。会場には約60名の市民の方がお見えになり、熱心にお話を聞いていただきました。また、佐藤は奈良文化財研究所と共同で、震災・津波に伴う住宅の高台移転の際に問題になると指摘されている文化財調査作業を地中レーダによって迅速に進めるための技術アドバイスを東北地方の地方自治体に行うための活動を共同で開始したところです。（佐藤源之）

第11回及び12回特別推進研究 「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」プロジェクトでは、センターのプロジェクト研究ユニット「東アジア出版文化」、及び共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」



富山大学人文学部（第11回会場）

（各代表：磯部彰）との共催で、平成24年2月4日に富山市の富山大学人文学部にて第11回目の研究会を、平成24年4月21日には東京丸の内東北大学東京分室にて第12回目の研究会を開催しました。当日のプログラムは、以下の通りです。

〈第11回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会〉

- 2012年2月4日(土) 開催
- 開会 磯部 彰（東北大学）
- 研究発表Ⅰ「清朝宮廷大戯『鼎峙春秋』について」 小松 謙（京都府立大学）
- 研究発表Ⅱ「明清宮廷の視覚文化 —全像金字西遊記絵本をめぐって—」 磯部 彰（東北大学）
- 総括

〈第12回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会〉

- 2012年4月21日(土) 開催
- 開会 —今年度の予定について— 磯部 彰（東北大学）
- 研究発表「『昭代簫韶』をめぐって」 大塚秀高（埼玉大学）
- 研究状況報告 研究メンバー全員
- 総括

富山の研究会は、例年がない雪の中で実施しました。前日は京阪からのJRが不通になる悪天候でしたが、当日はJRも動き、

研究分担者や若手研究者の他、金沢大学の研究者や院生、富山大学の院生にも参加いただきました。

小松先生は、連台大戯の『鼎峙春秋』が『三国志通俗演義』ばかりではなく、明代の三国戯曲などを多く流用している点を明らかにしました。私磯部彰は、新発見の『全像金字西遊記絵本』が小説に基づく明代宮廷用の絵入り本ではなかったかという仮説を提出しました。参加者からは、北京にもおなじような絵入本があったなどの情報も提供され、限られた日程の中、有意義な時間であったと思います。

平成24年度は最終年度にあたるので、研究会は出来るだけ多く開催し、情報交換と意見集約をより多く図ることにし、4月に入ると、早速、第12回目の研究会を開催しました。



小松謙先生（第11回発表者）

研究発表は埼玉大学の塚先生が担当し、宋代の楊家将物語に基づいた『昭代簫韶』の内容と小説との関係について紹介しました。

『昭代簫韶』は二色套印の内府本として印刷され、道光朝では盛んに承応戯として上演されていました。大塚秀高先生や小松謙先生が計画外の作品まで研究対象範囲を拡げていることから、宮廷演劇文化の性格やテキスト類の出版文化での位置づけなどが予想外の成果として生まれつつあります。

大塚先生の発表の後には、研究状況報告として、小松謙先生、陳仲奇先生、磯部祐子先生、加藤徹先生、中見立夫先生、そして磯部彰が分担事項の進捗度を資料等を用いて紹介しました。1人15分前後の発表でしたが、配布資料などを用いて宮廷演劇と清朝史の諸相を適切な形でまとめていただきました。会場が東京駅の隣りでしたので、片付け後にすぐ新幹線に乗れるのは良かったと思いました。

富山及び東京には穂苅みどり研究支援者がいつものように休日にもかかわらず出勤し、会場準備を滞りなく進めたので、遠隔地での研究会もスムーズに運営されました。（磯部 彰）

上廣歴史資料学研究部門設置記念公開講演会 「史料が語る日本と東北アジアの歴史」

- ・平川 新（東北大学災害科学国際研究所長）
- 「日本とロシアの古文書から見えてくる『帝国』の姿」
- ・チョローン・ダシダワー（ウランバートル大学教授）
- 「モンゴルの日本人抑留者」

この公開講演会は、本年度より東北アジア研究センターに設置された上廣倫理財団による寄附講座である上廣歴史資料学研究部門の開設を記念して、5月25日、東北大学東京分室を会場として開催されたものである。講演会では、日本人の歴史的歩みを記録した歴史資料の意義を論じる二つの講演が行われた。まず東北大学災害科学国際研究所長平川新氏による講演では、同氏が進めている宮城地域での歴史資料保全活動の概要が紹介されるとともに、氏が近年進めてきたロシアの文書史料を用いた



講演する平川新教授

近世日露関係の研究が紹介された。平川氏は、東北アジア研究センターのロシア史研究者寺山恭輔准教授等とともに、ロシア科学アカデミーの歴史研究者の協力を得ながら、ロシアに保存されている近世の史料を発掘、和訳して刊行する活動を行って

きた。ロシア側史料は、日本の近世史研究者にはよく知られておらず、近世の日露関係について様々な新事実を明らかにする。平川氏は、そのような事実の一例として、当時ロシアが日本を「帝国」と認識していたことに言及した。もう一つの講演



講演するダシダワー教授（左）

はモンゴル国のウランバートル大学教授チョローン・ダシダワー氏（国際交流基金日本研究フェロー）による第二次世界大戦後モンゴルに抑留された日本人に関する講演であった。現在モンゴルの国立公文書館には、1945年11月から1947年10月までモンゴル国に抑留され、労働に従事した日本の軍人・民間人抑留者に関する文書記録や写真・動画が残されている。ダシダワー氏は、これらの公文書や写真を用いながら、日本人抑留者のモンゴル抑留の経緯、収容所での生活、労働の様子、彼等が関わったウランバートルの建築、帰国の経緯などについて紹介した。また当日は、東北アジア学術交流懇話会の総会・懇親会も開催された。（岡 洋樹）

シベリアの調査地において民俗写真展が開催される

2012年3月22日から24日にかけて、ロシア連邦サハ共和国エヴェノ・ブイタンタイ郡サクリール（バタガイ＝アリタ）村で「日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み」と題する写真展が行われました。

この村は私が、1994-1997年に日本人初の本格的シベリア人類学調査を行った場所です。エヴェン人のトナカイ牧畜キャンプに泊まり込みながら調査し、多くの写真を撮りました。展示の目的の第一は、この写真を当地の人々に戻して見てもらい、さらにその電子データを贈る事を通して、研究の社会還元をするということです。研究資料として撮影された写真ですが、彼らにとっての個人的あるいは村の記憶であります。それらを村の記録として保管・利用してもらおう形に変えたいと考えました。

第二の目的は2008年にセンターが行った仙台市でのシベリア写真展において、来場者が書いた感想＝「シベリアの手紙」を翻訳し現地に届ける事でした。手紙は家畜トナカイを身近に暮らすシベリアの人々への共感とその文化伝統に対する驚きに溢れていました。これを現地に届ける事で、仙台市民がどのように彼らの生活文化を理解したのか、生

の声を伝えたいと思ったのです。

『展示図録・日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民族誌写真を現地に戻して展示する試み』[日露文]（高倉浩樹（編）オニスチェンコ・ヴィヤチェスラフ、ヴァンダ・イグナティエヴァ（訳）、東北アジア研究センター報告1号）を持って3月19日に現地入りしました。

3月後半とはいえ北極圏の村は、早朝には零下30度近くまで冷え込みます。そんな中で、子どもを含む多数の村人が来場してくれました。地元のテレビ局や新聞でも取り上げられました。同行したのは、本センター客員研究支援者千葉義人氏（空間デザイナー：千葉義人デザイン事務所）で、展示実務を担っていただきました。私と千葉義人氏には、エヴェノ・ブイタンタイ郡の首長およびサクリール村から感謝状が発行されました。

この展示の実現には、財団法人カシオ科学財団から支援がありました。なお、展示の様子は動画で見ることができます。

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/takakura2/lec/Review/Review.html>

（高倉浩樹）



開会式で儀礼を行ってくださった文化センター職員との記念撮影



多くの人でにぎわう展示会場

「シベリア展示に参加して」

事前情報は会場の写真が数枚あっただけだったので不安でしたが、現地の皆さんの協力を得て展示を実現できました。研究資料としての写真は時空を超えてトナカイ遊牧民と日本人の相互理解の架け橋になりました。写真という媒体がもつ多面性を確認できた今回の旅は私にとって興味深いものでした。

写真は四つの役割を持っていました。一つは研究資料。二つ目は現地の人の生活の記憶・記録。三つめは遊牧民文化を異なる地域（日本）の人に紹介する媒体。最後は今回の展示を行ったことで判明したことです。写真に写っている遊牧民の人達が、変化しつつある自文化や生活環境を確認するためのツール（世代間をつなぐ情報）となったこ

とです。展示を歓迎してもらえたのは何よりも嬉しい事でした。

現地を紹介した日本のTV番組と仙台紹介の映像はたいへん反響が大きかったです。映写するための器機と映写環境設営が必要ですが、映像の訴求効果は絶大です。しかし特別な機器と環境を必要としない写真は情報伝達の最たるものと思います。あえて普通紙にプリントした写真を使用しましたが、それでも情報媒体としては十分でした。写真と映像は展示の主軸です。展示効果が最大になるよう諸条件を見極めて今後も活用すべきと思いました。

（千葉義人 客員研究支援者・千葉義人デザイン事務所）

著書紹介

センター関連出版物

○東北アジア研究センター叢書

・46号 『達斡爾語詞彙』 蒙古文語索引 附：満洲文語索引 / 栗林均編 2012年1月

ダグル（達斡爾）族は、中国東北地方を中心に分布する人口約10万人の少数民族であり、その言語はモンゴル系に属すが、歴史的には満洲族とも深い関係をもってきた。本書は、ダグル語の語彙約7千項目の中から、モンゴル語との同源語と満洲語からの借用語を抽出したものである。

『蒙古文語索引』ではモンゴル文語形（ローマ字表記）を見出し語としてダグル語形（音声記号表記）を検索できるように、また『満洲文語索引』では満洲文語形（ローマ字転写）を見出し語としてダグル語形（音声記号表記）を検索できるようにしている。巻末に『言語学大辞典』の「ダグル語」の項目を概説として再録している。（栗林均）

・47号 『元朝秘史』 傍訳漢語索引 / 栗林均編 2012年1月

『元朝秘史』は、14世紀末にモンゴル語の原文を漢字の

音をもって表記したモンゴルの歴史書である。本文は漢字の音をもって表記されたモンゴル語の本文（音訳）と本文の単語ごとに付けられた逐語的な漢語の訳語（傍訳）、およびパラグラフごとに内容を要約した白話漢文（総訳）によって構成されている。本書は、四部叢刊本『元朝秘史』の傍訳漢語の全ての語句を抽出して中国語のピンインのアルファベット順に配列し、それぞれの語句の出現回数と出現位置、およびその傍訳が付されている元のモンゴル語のローマ字転写と漢字音訳形を示したものである。

（栗林 均）

○東北アジア研究センター報告

- ・ 2号 『モンゴル史研究と史料』 / チョローン・ダシダワー、チンゲルト、岡洋樹編 2011年3月

本書は、2009年9月20-21日に東北アジア研究センターがモンゴル科学アカデミー歴史研究所、中国内モンゴル師範大学蒙古学学院と共催した国際シンポジウムに提出された報告論文集である。内容は四部から成り、第一部「モンゴル史の史料」（論文3件）、第二部「大モンゴル国と史料」（論文6件）、第三部「満洲時代の史料」（論文17件）、第四部「20世紀モンゴル史と史料」（論文8件）が収録されている。収録論文はすべてモンゴル語。本センターは、2003年から隔年にモンゴル国ウランバートルでモンゴル史に関する国際シンポジウムを開催、報告論文集を刊行してきたが、今回のシンポジウムは四回目当たる。

（岡洋樹）

- ・ 3号 『歴史遺産を未来へ』 / 平川新・佐藤大介編 2011年12月

本書は、2010年11月13日に東北大学川内萩ホールで開催されたシンポジウム「歴史遺産を未来へ」の内容に基づいている。日本では、歴史資料の大半が各地の地域社会に残されている。これらは高齢化や過疎化、大規模な災害により消滅の危機に瀕している。シンポジウムでは、現状に対応して歴史資料を保全するための課題と方法が議論された。本書所収の各論考には、多くの論点が余すところなく示されている。なおシンポジウム開催の4ヶ月後、2011年3月11日に東日本大震災が発生した。本書の内容は、被災地での実践や、今後懸念される関東以西での震災に備えた対応の検討にも資すると確信している。

（平川 新）

- ・ 4号 『よみがえる町の記憶—通町・堤町・北山界隈の歴史—』 / 平川新編 2012年2月

本書を企画したきっかけは、仙台市青葉区通町にあった江戸時代後期の町屋建築、通称「検断屋敷」の解体である。この建物と地域の歴史について、2009年6月から7月にかけて歴史報告会を開催した。本書にはここでの講演に基づく通町・堤町・北山地区の江戸時代の歴史を解明した論文4編を所収している。さらに、解体に際して発見された古文書資料や堤町の江戸・明治・大正期の伝承をもとに描かれた絵画資料も掲載した。本書は、一つの歴史的な建造物が使命を終えて姿を消す際、建物と建物のあった地域に関する「物語」を文献史学の立場から明らかにして、長く記憶と記録にとどめようとする試みの一つである。

（平川 新）

○東北アジア研究 第16号（2012年2月）

掲載論文

麻田雅文「日露関係から見た伊藤博文暗殺：両国関係の危機と克服」、角道正佳「キリル文字正書法確立前のモンゴル語口語辞典の表記について」、朱琳「梁啓超におけ

る中国国家体制の構想：「自治」と「聯邦制」を手がかりに」、財吉拉胡「内モンゴルのシャマニズムにおける成巫過程と治療儀礼：東部ホルチン地域のシャマニズム的治療の事例研究」、蝦名裕一「『大名評判記』における仙台藩伊達家の記述について」、栗林 均「近代モンゴル語辞典の成立過程：清文鑑から『蒙漢字典』へ」、李晶「政府庇護下の日本の農協：仙台秋保町の人類学調査」、額定其芳「清代ハラチン・モンゴルの右翼旗における裁判」、瀬川昌久「氏姓のポリティクス：現代中国における文化資源としての族譜とその活用」、ガンバガナ「内モンゴル自治運動と太平洋戦争期における日本の対内モンゴル政策について：『日華同盟条約』を中心に」、BIRTALAN, Ágnes「The Black Book of the Holy Chingis Khan: Remarks on a 19th Century Mongolian Folklore Source」、熊静「清代内府“九九大慶” 戲研究：以北京大學圖書館藏《九九大慶》為例」

○学術図書

- ・ 『客家の創生と再創生』 / 瀬川昌久・飯島典子編（風響社）2012年2月

センターの瀬川昌久教授が代表を務めた共同研究＜客家研究の総括と展望＞（平成22～23年度）の研究成果として、学術図書が出版されました。中国の漢族の一グループである客家（ハッカ）の人々の伝統文化とされるものが、現代の観光化その他の文脈の中で新に創造されている現象を分析したもので、現代中国の文化現象の一端を解明した意欲的な研究です。目次・内容等の詳細は、<http://www.fukyo.co.jp/book/b100421.html> 参照。

（瀬川昌久）

- ・ 『極寒のシベリアに生きる——トナカイと氷と先住民』 / 高倉浩樹編（新泉社）2012年4月

日本初のシベリア研究入門書である。シベリアの自然環境と人類史における位置づけ、先住民文化の多様性、さらに近年の温暖化がもたらす社会への影響について、文化人類学・言語学・神話学・保全生態学・水文学・土木工学などの文理双方の専門家がわかりやすく解説している。本書を読むとロシア国の地方という意味でのシベリアと、歴史的に東アジアやモンゴルなどと相互に関連しあう独自の文化世界としてのシベリアの双方の特質がわかる。センター兼務教員の奥村誠氏も執筆しているが、彼の描く「冬道路」の仕組みは、文理の専門家間でのフィールドの共有によって明らかになった日本では従来知られてこなかった新知見である。

- ・ 『聞き書き 震災体験——東北大学90人が語る3.11』 / 高倉浩樹・木村敏明監修、とうしんろく編（新泉社）2012年3月

東日本大震災の震災体験について東北大学の学生・留学生・教員・職員・関係業者・たまたまの訪問者から聞き取り調査を行った記録の報告集。編者はこの事業を行った学生と教員によるグループ名。本書は大学という組織における成員の震災体験の多様性を明らかにする。激甚被災地での被災者、海外滞在中だった人もいる。その後大学の復旧復興にむけて協力のあり方、逆にどのような溝ができたのか、さらに独身学生の苦境や留学生の気持ちの複雑さも示されている。激甚被災地ではない場所で3.11がどのような震災だったのかについての記録は少ない。この点で大きな資料的価値がある。大学の災害対策関係者にも是非読んで欲しい。

● センター新任紹介 ●

トゥヤーラ・ガブリリエヴァ教授

2012年5月1日から8月末までの4ヶ月の予定で、ロシア連邦サハ共和国のヤクーツク市にある北東連邦大学（Northeast Federal University）からトゥヤーラ・ガブリリエヴァ先生を客員教授としてお迎えした。

ガブリリエヴァ先生は、1992年ノボシビルスク州立大学経済学部を卒業後、ヤクーツク州立大学講師、サハ共和国政府の貿易・経済開発関係のプロジェクトに従事、1996年よりサハ共和国北方地域経済研究所にて地方財政学の研究を行い、経済学博士を取得された。なお上記の研究所は、2011年に北東連邦大学に移管された。

滞在中は、奥村教授、大窪助教が推進する「交通途絶と地域孤立に関する研究」に参画して、交通の維持に対する連邦政府・地方政府の政策と財政支出の分析を通して、交通の持つ社会的な価値の計量化を進めていた。また、途絶に伴う人々の対応行動、価格の変動、備蓄をはじめとする準備行動のモデル化に当たっていただくこととしている。

これまで人文科学分野に限られてきたヤクーツク地域において、新たに経済学分野の研究者との交流を行うための窓口、さらに北東連邦大学、ヤクーツク州立大学、および出身校であるノボシビルスク国立大学の学生との交流窓口の役割をお願いして、今後の本センターのシベリア研究と本学の教育交流活動の発展のために貢献していただくことを期待している。

今回は、同じく経済学の研究者であるご夫君と、8歳の娘さんと一緒に家族で滞在され、日本での生活経験や国内旅行も楽しみにされている。GWには早速、松島にて、ロシアでは見られないような海岸風景を家族で楽しまれた。学内では主としてセンター4F西端の客員教授室を利用するので、センター関係各位との気軽な交流をお願いします。（紹介 兼務教員 奥村 誠）



荒武 賢一朗 准教授

初めてご挨拶申し上げます。2012年4月に東北アジア研究センターの准教授として着任しました。今年度から本センターに新設されました寄付部門「上廣歴史資料学研究部門」に所属しています。日本各地には多くの歴史資料が残されています。これは先祖代々大切に受け継がれてきた、まさに「歴史の証」です。これを「古文書（こもんじょ）」と呼んでいます。私たちはその貴重な資料を保全し、そして培われてきた文化を丁寧に分析していこうと思っています。

私の専門は、江戸時代から明治時代の経済史です。経済と一言で片付けてしまっていますが、歴史の分野でもいろいろなテーマが含まれています。そのなかで私の出発点とも呼べるのは、「屎尿」取引の歴史的考察でした。長い人類の営みにおいて、食べ物に対する関心はとても高い。歴史家にとっても同じで、毎日の食生活については多くの研究がありますが、一方で「排泄物」の研究はほとんど目立ちません。そこで私は、人口の多い都市で無用となった屎尿が、郊外の農村で貴重な肥料として扱われていく様子を面白く思いました。そこから社会環境史の研究を

進めたのです。

文献資料とともにフィールドワークも重要です。私もこれまで日本列島の各地を歩いてきました。都会、農村、漁村、離島と、地域のみせる顔はさまざまですが、文書では得られないたくさんの方の発見がありました。しかし、その多くの地域では日本全体が抱える少子高齢化、過疎、限界集落という切実な問題が横たわっています。これに対して、歴史研究者に何ができるのだろうか。非常に単純ですが、地域資料を丁寧に調査する、そしてその内容を地域の人々に紹介する。私にはこれしかできませんが、自分が思っている以上に調査先では大変喜ばれるし、盛り上がりがあります。こういう活動を積み重ねることが「地域の誇り」を取り戻し、新しい社会を創出するのだと考えています。



高橋 陽一 助教

2012年4月1日より上廣歴史資料学研究部門に助教として着任いたしました。生まれは四国・徳島、育ちは関西・奈良ですが、研究活動に関しては、大学入学以来一貫して東北・宮城と東北大学にお世話になっています。大学院修了後は東北大学百年史編纂室に勤務し、編纂事業終了後は専門研究員として文学研究科に在籍しながら、岩沼市で市史編纂業務に携わりました。恵まれた環境の中で日本史・大学史・地域史を学び、引き続いて歴史研究に関わる仕事に従事できることをとても幸せに感じています。

私の専門は日本近世史で、特に江戸時代の旅について研究を行っています。現代より制約は多かったものの、日本において一般民衆が比較的自由に各地を旅することができるようになったのは江戸時代からだと言われています。旅がブームなのは現代も同じですが、この江戸時代の旅の歴史的特質は何なのか、それを解明することが私の大きな研究テーマです。この問題について、これまで私はお伊勢参りの記録や温泉に伝存する古文書を分析してきましたが、今後は東北地方を旅した人々の紀行

文や道中日記を積極的に読み解いていきたいと考えています。それは、「地域と歩む歴史学」を標榜する本部門に所属するなかで、単に日本近世史のみならず、東北地方の地域史についてもより深く考えてみたいという思いがあるからです。

東北アジア研究センターは、大学院生時代にアルバイトをさせていただいていたときから、学問領域や国の枠組みをこえた多彩な学識を吸収できる魅力的な場所ではないかと感じていました。何気なく目にする通路の看板で、先生方やユニットの研究概要を確認できるのがありがたいです。この機会に各国の歴史や文化、風土に目を向け、「日本」を相対的にみる視点も養いながら、自分の研究を豊かで懐の深いものにしていきたいと思っています。どうかよろしくお願いたします。



金賢貞 助教

2012年5月1日から本センターの助教に赴任しました金賢貞（キム、ヒョンジョン）と申します。韓国のソウル市出身で、1998年から1999年までの1年間、初めて日本に来て生活したのですが、そこが仙台でした。当時の文部省の留学生として東北大学法学部に在籍しながら、色々な体験をし、韓国社会や文化との違いに驚かされる毎日を送りました。当時、特に興味を覚えたのが神社や神社祭祀です。現代韓国のクリスチャン・チャーチのように、地域社会に数多く存在する神社は、日本の「神社」といえば、靖国神社であり、なんとなくナショナルスティックなものだと思い込んでいた私に新鮮な衝撃を与えました。仙台で目にした神社は非常にローカル性が強く、祭りなどの催しを通してさらにそのローカル性を強化する仕組みを持っていました。それで、韓国の大学を卒業後、日本の筑波大学大学院に留学し、日本の地域社会論というパースペクティブから神社や神社祭祀を長期間のフィールドワークを通して調査・研究しました。2007年に博士号を取ってからは韓国に戻り、約3年間韓国の大学で非常勤講師をしました。そして、日本の地域社会における地縁性をほとんど持たない韓国の地域社会で比較社会・文化論を念頭に置きつつ、フィールドワークを行いま

した。しかし、日本でさらにフィールドワークを重ね、日本の事例研究を深めるべく、2010年にJSPSの外国人特別研究員として再度来日し、東京大学文化人類学研究室に在籍しながら、埼玉県秩父市で約1年半フィールドワークを行いました。

専門分野は民俗学ですが、社会学や人類学の方法論や理論を援用しつつ、地域社会の仕組みや構造原理、地域生活のあり方を日韓だけでなく、さらに東北アジア圏内で比較研究していきたいと考えております。但し、本研究センターでは研究支援部門に属しておりますので、センターの国際交流の振興や研究成果の国内外への発信の業務に、外国人としてのこれまでの経験を活かしつつ、積極的に取り組んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



教育研究支援者 稲澤 努

本年4月から東北アジア研究センターの教育研究支援者に着任しました。私の専門は文化人類学です。中国におけるエスニシティを研究課題とし、本学大学院環境科学研究科在学中に中国南部にある広東省東部の港町でフィールドワークを行いました。そこには、1950年代までは船を家として暮らし「水上居民」とされていた人々で、現在は陸上に住み「漁民」と呼ばれている人々があります。彼らと暮らしをともにし、彼らがどういう生活をしているのかを体験しながら観察しつつ、そうした暮らしの中で、あるいは政治や学術による表象によって、「漁民」はどう他の人々から差異化されているのか、といった問題を中心に研究を進めてきました。今後は彼ら「漁民」の海上での労働の在り方や、出稼ぎ、もしくは移民先である香港での暮らしなどにも目を向けてこれまでの研究を深化させつつ、中国南部に存在する多様な方言、生業等によって差異化がなされている様々な人々も対象として、幅広く研究していきたいと考えています。

また、私が所属している本センターの「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」では文化人類学的中国研究において主要な研究テーマとなってきた「宗族（そうぞく）」

という父系親族集団を主たる研究対象としています。「宗族」という研究対象の変化と、それを研究する研究者の視座の変化というダブル変化を対象化し客観的に総括することにより、目まぐるしく変容しているといわれる現代中国社会において、何がどのように変容し、持続しているのかを理解することを目指しています。そのために、国内外の研究者と連携し、問題意識の共有をはかりながら議論を深めていく予定です。こうした学外の研究者との交流をする際も、日々の研究を進めるにあたって、本センターの皆様のお力をお借りしなければならないことばかりです。何卒よろしくお願ひいたします。



人事異動

災害科学国際研究所の設立にあたり本センターからは平川新教授、奥村誠教授が4月1日付けで研究所へ異動となりました。またセンターにおいて文化財レスキュー活動で活躍していた佐藤大介助教、蝦名、天野研究教育支援者が同じく災害科学国際研究所に着任されました。

一方、新しく設置された上廣歴史資料学研究部門には荒武賢一朗准教授、高橋陽一助教が着任されました。

研究支援部門では徳田由佳子助手が任期満了に伴い退職され、新たに金賢貞助教が採用となりました。また長年東北アジア学術交流懇話会の事務局を務めてこられた岩山健三技術補佐員が退職されました。

(佐藤源之)



現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニットの活動

東北アジア研究センター 教授 瀬川 昌久

私は、中国東南部をフィールドとし、その文化・社会について文化人類学的な手法で研究しております。大学学部生のとき以来ですから、かれこれ三十数年も中国研究に携わっていることとなりますが、この間に2つの巨大な「変化」に直面しました。1つめは、誰の目にも明らかな顕在的な変化ですが、研究対象である中国社会自体が経済発展を遂げる中で激変しました。2つめは、より潜在的な変化として、研究者の側でも、また一般の日本人の間でも、「中国社会」に対する認識が大きく変化しつつある点です。

私が、本年4月より、東北アジア研究センターのプロジェクト研究部門の1研究ユニットとして主宰している「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」は、まさにこのような中国社会に関する2つの大きな変化を対象化し、それらの間の相関を深く掘り下げることを目的とした研究です。もっとも、上に掲げた2つの巨大変化を全般的に扱おうとすると、漠然とした議論にしかありませんから、研究そのものは地味に、特定の題材に絞ったものとなっています。それは「宗族（そうぞく）」という中国人社会にみられる父系親族組織です。

宗族は父系の血筋を同じくする人々の集まりで、共通祖先の祭祀や財産の共有を通じて団体的な性格を帯びることもあり、特に中国南部では集住して村や町を形成していたりします。20世紀の半ばには、急進的な社会主義改革の中で、封建的遺物として批判・解体されましたが、1990年代以降は急激に復活を遂げています。宗族に対する研究は、歴史学や文化人類学においては20世紀の前半から盛んに行われており、特に文化人類学においては20世紀中葉の主要な研究テーマの1つでさえありました。

総じて言えば、20世紀中葉の文化人類学者の宗族に対



祖先の位牌を祀った祠堂（しどう）。中国東南部では90年代以降続々と再建・新設されるようになった。（広東省海豊県）

する眼差しは、それを中国社会の「本質」を理解するための重要な手がかりとして仮定していました。ポジティブには中国人の家族・親族の絆の強さと機能性を示すものとして、またネガティブにはネポティズム（身びいき）やコネ社会などの後進性を生む元凶として理解されてきたふしがありま

す。今日、宗族の復活現象を目の当たりにしている文化人類学者は、そうした中国社会における父系血縁の紐帯の根強い影響力に注目するとともに、宗族という文化的な様式に与えられた新たな現代的価値、すなわち「文化資源」としての価値にも注目しています。こ

こで言う文化資源とは、人々が自分たちの宗族を復興させることにより、自らの歴史や出自を誇示し、さらにはそれを観光開発や地域再編のコアにしようとするなど、住民や地方政府が自覚的にその価値を認識して利用しようとしている文化要素を指します。

宗族という、あまり日本では知られていないマイナーな題材ですが、それに注目することによって、中国社会自体の変化と中国社会について認識する側（そこには研究者、中国の一般住民、政府関係者、国外の一般人や観光客、といった多様な意識主体が含まれます）の変化という、二重・三重の変化についての、きわめて精度の高い分析が展開できると考えています。同研究ユニットは、私と本学大学院文学研究科の川口幸大准教授、本センターの稲澤努教育研究支援者から構成され、また学外からは1990年代以来中国でのフィールドワークにより宗族について詳しく研究してきた主要な文化人類学者たちや、現在大学院博士課程の学生やPDの身分で宗族に関わるフィールドワークを実施中の若手研究者たちを糾合して組織されました。初回の研究会は7月に東北大学東京分室において開催され、2014年度末までには成果図書の刊行を目指します。

ともすると、経済発展や政治的プレゼンスの高まりだけが注目されがちな中国ですが、その社会の内側で生じつつある諸現象、その底流をなす庶民生活の中で進行している諸事象に目を向けてゆくと、新聞やテレビの時事解説だけでは窺い知ることのできない中国社会のディープな姿が浮かび上がってきて、興味は尽きません。



祠堂を目玉のひとつにしている観光地。（広東省南雄市珠璣巷）



中国各地で編纂が盛んな家系記録を記した文書・族譜（ぞくふ）。（広東省広州市）



2012年度最初のニューズレターをお届けする。年度初めということで、新たに赴任された方々を加えてセンターが新たに出発することになった。新メンバーの紹介と、震災後にもかかわらず1年間の活発な研究活動、出版活動についてもご覧いただけたと思う。夏以降にセンターの本拠地である川北合同研究棟の本格的な修復工事が始まる予定であり、落ち着いた研究・教育という環境を得るまでもう少しの辛抱である。（寺山 恭輔）